2016 年 7-12 月

20160723
亀山郁夫『ゴルバチョフに会いに行く』集英社、2016 年。
政治と文明について深い関心をもつ文学者の著作である。
著者が文学者である以上、社会科学や歴史学の観点からすれば、あれこれの不正確さや叙述の混乱を指摘することもできるが、そのようなことをあげつらっても、あまり意味はないだろう。
ソ連・社会主義・ペレストロイカ・ゴルバチョフ・ソ連解体等々といった一連のテーマは、ある時期まで、少数の専門家のみの縄張りではなく、相当広い範囲の人々の関心を引いていた。だが、今ではそうした人は激減している。現代世界の大きな趨勢としてのグローバリズムや世界各地における紛争の激発を「ソ連という国の最後」との関連で考えようという試みも極小である。そうした状況の中で、政治学者でない著者がこうしたテーマについて執拗な関心をいだき、何とかして考え抜こうと苦闘していること自体が貴重だと感じる。
本書の中心になるはずだったゴルバチョフとのインタヴューは、時間がごく限られていたこともあり、比較的短いもので、内容も特に新鮮というわけではない。初対面の著者に対して、ゴルバチョフが短時間のうちに胸襟を開いて内面を吐露したり、これまで未知だった事実を洩らしたりなどといったことは、もともと期待すべくもない。私個人としては、インタヴューの時点で 83 歳になっていたゴルバチョフが認知症にはなっておらず、まともな受け答えをしているだけでも僥倖だったという気がする。
最近刊行されたゴルバチョフ著作集第 26 巻は 1991 年の 5 月から 7 月までの文書を収録しているから、あと２、３巻出れば、同年 12 月のソ連解体およびゴルバチョフ退陣にまでたどり着くはずである。それまでの間、彼が心身の健康を保ってくれることを願う。

20161002
学会シーズン。
若い頃はあまり学会というものに馴染むことができず、積極的に参加することも少なかった。一つには、生来の人付き合いの悪さ故であり、文系の学問は自分一人でやるものだという思い込みもあった。
だんだん歳をとるにつれて、自分のできることの限界が見えるようになり、他人の問題意識を理解して、それと自分の研究をどう交錯させるかについて考えることの大切さを遅ればせに感じるようになった。定年退職後は、積極的にこの種の機会を捉えるようにしないと若い人たちとの交流のチャンスがなくなるのと、ある程度時間の余裕ができたことのおかげで、以前よりも学会出席率が大分高まった。もっとも、同世代以上の人の出席率はだんだん落ちているので、知己と出会う確率も下がりつつあるが、その代わりに若い世代との出会いを大事にしたいと考えるようになった。
ということで、昨日と今日は立命館大学いばらきキャンパスで政治学会大会。私はもともと「政治学者らしくない政治学者」なので、こういう場に来ると「よそ者」意識が抜けな

いが、歳をとると面の皮が厚くなり、いわば「異文化との遭遇」のようなものを楽しめるようになってきた。
来週は東北大学でロシア史研究会大会。こちらは自分のホームグラウンドに近いが、今年の大会の報告の大半は私の研究テーマとはわりと離れたものなので、政治学会とは違った意味で「異文化との遭遇」になるかもしれない。その折りにもう一つ企画があるが、これがどうなるかも未知数だ。

20161010
学会シーズン（その 2）。
10 月 7-9 日、東北大学でロシア史研究会大会。私はこれまで名古屋以西と北海道にはあちこち行ったものの、東北地方はなぜか空白だった。2011 年震災の後、いつか行かねばと思いつつ、ちょうどその頃から座骨神経痛が悪化して、思うに任せず、今回ようやく遅ればせの仙台デビューとなった。今頃、大都会の中心地に行っても震災の爪痕など残っていないのは当然だが、研究会前日に多少歩き回ったところ、ごくうっすらと痕跡が感じられるような気がした。何ができるわけでもないが、全然行かないよりはましということか。
研究会は、今年は私の専門テーマと直接関わるものがほとんど無かったが、いろいろと新しい刺激を得ることができた。共通論題 I の「ロシア史における宗教間関係」という問題設定は特に感心した。個別の宗教を取り上げるのではなく、諸宗教の関係に眼を付ける発想はこれまであまりなかったものだろう。やや突飛な思いつきだが、「多文化主義」「多言語主義」という概念が盛んに議論されていることとの類比で、「多宗教主義」という概念も成り立つ余地があるのか、そんなものはありえないのかといったことを考えさせられた。その他、ペレストロイカ期における環境政治、カナダのウクライナ人コミュニティなど、私がかねて興味をいだきながらなかなか実態に近づきかねていたテーマの報告を聞けたのも収穫だった。
研究会自体が終了した後に、ロシア革命 100 周年を記念する座談会を東北大学の一室で行なった（来春刊行の『ロシア史研究』に掲載予定）。事前の準備段階では、各人が勝手なことを言いっぱなしにして、収拾がつかなくなるのではないかという危惧もあったが、案外面白いものになったような気がする。

20161031
学会シーズン〔その 3〕。
10 月 29-30 日、京都女子大学でロシア・東欧学会大会。私にとって、近いような遠いような微妙な学会だが、その距離を測ろうとすること自体にも、何らかの意味があるかもしれない。
第 1 日は午後から参加。「漂流する世界とプーチンのロシア」のパネルディスカッション。この種のシンポジウムの例に漏れず、言いっ放しの観もなくはないが、とにかく議論のきっかけを作ること自体に意義があるのだろう。シリアをはじめとする中東地域はロシア・旧ソ連圏とは一定の距離があるとはいえ、歴史的に密接な関係があるし、ポーランド〔およびその他の中欧諸国〕は今では「ロシア離れ」が著しく、実態のみならず研究者の世界でも「〔ロシアと区別される〕ヨーロッパの一部」と見なされることが多いが、それでも

ロシアとの関係を切り捨てることができないという微妙な位置にあり、これらに関する黒木報告と小森田報告が聞けたのは収穫だった。他方、ロシア外交に関する小泉報告と宇山報告は、〔私が外交史を専攻していないため、素人としての印象論だが〕、微妙にニュアンスを異にする気がして、その違いこそが面白いのではないかと感じた。
2 日目午前は、「東欧」の分科会と「旧ソ連ほか」の分科会を行ったり来たりした。報告の成熟度も討論の活発度もまちまちだが、ともかくこうした機会を通して、特に若手の研究進展のステップとなればよいがと思う。
2 日目午後は、シンポジウム「記憶の政治とシベリア抑留問題」。私自身はこれまで抑留問題に取り組むことはしてこず、富田武氏の研究から学ぶばかりだが、いろいろと刺激になった。「記憶の政治」の方は橋本伸也氏を中心とする共同研究に参加したおかげで、この間いろいろと考えてきたが、それと抑留問題をどう結びつけるかが今後の課題だろう。袴田茂樹氏がどういうコメントをするかも関心事だったが、私の都合で最後までいることができなかったのが心残りだ。
これで秋の学会シーズンは一段落。短期間にいろんな人と会い〔研究会のほか、前後の雑談を含む〕、多面的な刺激を受けると同時に、頭の中が混沌としてくるという面もあったが、これからまた普段の研究に戻らなくてはならない。

20161104
渡辺暁雄と栗本尊子。
音楽通の左近幸村氏が 10 月 19 日の FB で、指揮者の渡辺暁雄の名を知ったのは没後十年くらい経った頃だったと書いているのを読んで、軽いショックを受けた。渡辺暁雄といえば、私の若い頃に大活躍していて、確か「日本フィル・アワー」とかいうテレビ番組で毎週のようにその演奏ぶりを見ていた記憶がある。ダンディなジェントルマンで、ミーハー的なファンも多かった。その彼がそれから大分経って逝去し、それから更に十年も経ってから彼の名を聞いた青年が、今では一人前の研究者になっている。つくづく歳月の経過、および若手と自分の世代差を感じて、ああもうそんなに時間が経ってしまったんだなあと感じた。
それからしばらくして、今度は栗本尊子に関するサイトを見つけて、これまた感慨に耽った。栗本尊子といえば、今の若い人は名前も知らないかもしれないが、かつては日本を代表するメゾソプラノ（ないしアルト）の歌手だった。N響の年末恒例の第 9 では、彼女がアルト・ソロを歌うのが定番だったような気がする。生年を確かめてみると、渡辺暁雄が 1919 年、栗本尊子が 1920 年で、ほぼ同世代であり、どちらも 1960-70 年代が全盛期だった。1960-70 年代といえば、私にとっては少年期から青年期にかけてのことだが、今の若い人たちにとっては、「有史以前」くらいの古い時代なのだろう。
ここまでの事情は二人に共通しているが、渡辺暁雄が大分前に世を去ったのに対し、栗本尊子は今なお存命であるばかりでなく、まだ現役の歌手として演奏活動を続けているという！ YouTube で聞けるのは 3 年ほど前の録画だが、その時点で既に 90 歳を超えていた。聞いてみると、さすがに声の衰えは隠せないものの、心を込めて丁寧に歌う歌いっぷりは、往年の名歌手の名を辱めない立派なもので、感動した。
ひるがえって、われわれも（私も）90 歳を超えて現役の研究者であり続けられるだろう

かと自問すると、「そうありたいものだ」という気持と「無理だろう」という気持ちが交錯する。どちらに転ぶかは神のみぞ知るだが、これから先、老いを感じて心弱くなったときには、栗本尊子の歌声を聞いて、自分を励ますことにしよう。

20161109
アメリカ大統領選挙については大勢の人があちこちでいろんな発言をしていて、私ごときが余計な感想を述べるまでもないと思っていたが、一言だけ感想を書き留めておきたいという気がしてきた。
伝えられるところによれば、いわゆる「トランプ現象」の一つの背景として、リベラルな知識人層に対する反撥と不信、そしてたとえば外国人とか移民といった人たちへの適切な配慮や理解が必要だといった「建前のきれい事」に対する反撥、むしろ自分たちの方が損をしているんだという自意識を何はばかることなくぶちまけたいという感覚などがあるようだ。
こうした、いわば「ぶっちゃけ本音主義」は、日本でも近年相当広まっている。それどころか、どうもヨーロッパ諸国でもかなり広まっているみたいだし、ロシアでも相当強い。それ以外の国々のことはよく知らないが、どうもこれは世界的な現象ではないかという気がしてならない。もちろん、「ぶっちゃけ本音主義」はトランプとともに始まったわけではなく、もっと以前からの背景を持っている。だが、世界中で注目を浴びるアメリカ大統領選挙のキャンペーンを通じて、「押しも押されぬ民主国家」とされる国でこうした発想が何恥じることなくぶちまけられ、大手を振ってまかり通っているのを見て、日本を含め世界の多くの人々が、「そうだ、こういうことを大声で言ってもいいんだ」という感覚を抱き、一層歯止めなくこの風潮が強まってきたというのが、この一年ほどの選挙戦を通じての状況であるような気がする。
これがアメリカだけのことであったなら、いくらアメリカが今なおいろんな分野で「相対第一位」の国だといっても、他の国々への影響は限定的かもしれない。また、選挙戦中における極端な言辞は、いったん就任してからは多少抑えられて、より現実的な政策をとるようになるのではないかとの観測もある。しかし、アメリカだけではなく、世界中の多くの国で「ぶっちゃけ本音主義」の風潮がますます強まり、それを背景とした政治家たちがむきだしの他国排斥とか攻撃とかの勢いを強めるようになったら、世界は一体どうなるのだろうか。

20161127
いわゆる「コーエン論争」について
アメリカのロシア研究者スティーヴン・コーエンが全米スラヴ学会に寄付をして、自分の名前を冠した奨学金を創設したことをめぐり、賛否両論の激しい論争がアメリカで交わされたようだ。日本では沼野充義氏が 11 月 13 日の FB でこの件を紹介し、そこに私を含む何人かが書き込みをして、アメリカほど激烈にではないが、一種の「ミニ論争」めいたものが展開された。
私はコーエンの若き日の出世作『ブハーリンとボリシェヴィキ革命』（原著は 1973 年、拙訳は未来社、1979 年）の訳者ではあるが、人づきあいが悪く、彼と親交を保ってきたわ

けではないし、最近の彼の言動にもあまり通じていない。しかし、どことなく気になるところがあり、間歇的にではあるが、彼の発言およびそれをめぐる批判や論争を遠くから見守ってきた。このたびの論争に関して十分な情報をもっているわけではないが、とりあえず知る限り（また推測できる限り）のことをまとめてみたい。以下の文章に「ようだ」「らしい」という自信なげな表現が頻出するのは、推測に頼った部分が多いことを示す（なお、最近全米スラヴ学会大会に出席してきた大串敦氏から貴重な情報提供を受けた。謝意を表すると同時に、以下の小文にありうる誤りは氏のせいではないことを明記する）。

ごく最近のことについてはよく知らないが、21 世紀初頭の時期のコーエンは、アメリカの外交政策（特に対ロシア政策）に対する痛烈な批判者だった。主要な標的はブッシュ・ジュニアだったとはいえ、その批判はビル・クリントン期にまでさかのぼっている。オバマ登場時には一定の期待を抱いたようだが、その後に幻滅したように見える。アメリカの対ロシア政策は民主党政権でも共和党政権でもほぼ一貫して間違っていたというのが彼の見解である。彼はプーチンのロシアを正当化しているわけではなく、ロシアにおける種々の問題点も指摘しているが、それよりもむしろアメリカおよびＮＡＴＯ側の間違った政策のせいでロシアがそのような状態に追い込まれたのだという側面を重視するのが彼の特徴である（なお、彼は故ジョージ・ケナンもＮＡＴＯの東方拡大に関し自分と似た懸念をいだいていたとしている）。その結果、彼はしばしば「プーチン独裁の擁護者」といったレッテルを貼られ、アメリカの論壇で孤立した状況にあるように見える。

ついでながら、コーエンの夫人 Katrina vanden Heuvel（どう発音するのか分からないので、カタカナ表記を避ける）は『ネイション』という雑誌の編集長をつとめ、コーエンと二人三脚のような感じで活発な言論活動を展開しているようだ。同誌は今年のアメリカ大統領選挙では、はじめのうちサンダーズを支持し、民主党の候補がヒラリー・クリントンと決まってからは、トランプ阻止のためにヒラリー支持に回ったようだ。この範囲であれば、アメリカ知識人の間でそれほど風変わりでも少数派でもないということになりそうだが、何といってもコーエンのアメリカ外交政策批判が強烈であり、その反射的結果として、あたかも「プーチンの擁護者」であるかに見なす非難攻撃を浴びている点は彼を一匹狼的な存在としている。

研究者が論争的な政治問題に関する発言をして、誤解を含む非難にさらされるという例は、コーエンに限られるわけではない。日本でいえば、和田春樹氏のことが思い浮かぶ。和田氏は北朝鮮問題・従軍慰安婦問題・北方領土問題などについて活発な発言を繰り返してきた。それに反撥する人たちの一部は、「北朝鮮賛美者」「ロシアの手先」「反日分子」といったレッテルを貼って、激しい攻撃を加えている。あくまでも仮想の話だが、仮に和田氏がロシア史研究会に何らかの寄付をして、それを快く思わない人たちが、「和田は北朝鮮賛美者だ。そういう人物の寄付など受け入れるべきでない」と主張したら、ロシア史研究者はどう反応するだろうか。多くの人は、和田氏の研究なり政治的発言なりの個々の部分については種々の批判がありうるにしても、全体として氏が立派な研究者であることは疑う余地がなく、そうした非難は筋違いだと反論するのではないだろうか。

「コーエン論争」をこのようなアナロジーで解釈することに対しては異論があるかもしれない。コーエンと和田氏を単純に同一視できるわけでないのはもちろんである。ただ、きちんとした業績をあげてきた経歴を持つ研究者であると同時に、現実政治にも強い関心を

いだき、センシティヴな論争問題にも「火中の栗を拾う」リスクを恐れず、それ故にときとして強い非難攻撃にさらされることがあるといった点では一定の共通性があるように思われる。
コーエンに戻っていえば、最近の彼の発言を丁寧に点検した上でなければ、そこにある種の「勇み足」があったのか、仮にあったとしてそれはどういうものか、それと関連した彼への論難がどの程度正当か／不当かを判断することはできない。その意味で結論は留保するしかないが、とにかくこの種の問題は論争的な現実政治上の問題にコミットする際についてまわるリスクであるように思える。他人事ではない。
予め断わったように、この小文は不十分な情報に基づいて書かれたので、思わぬ間違いや偏りを含んでいるおそれがある。そうした点を補正する情報をお持ちの方は、どうぞ御教示ください。

20161216
広井良典『創造的福祉社会――「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』ちくま新書、2011年。
同　『ポスト資本主義――科学・人間・社会の未来』岩波新書、2015 年。
私はこれまで広井良典という人について、新聞などに載るインタビューや短文を通じて名を知るのみで、詳しいことはほとんど全く知らなかった。それでも、ときおり断片的な発言に接する中で、よくは分からないがわりといいことを言っているみたいだという気がしたので、とりあえず二冊の本を続けて読んでみた。相当多数の著書があるらしいが、二冊の間にわりと重複もあり、基本的にはほぼ同様の趣旨であるように思えたので、おそらくこういったあたりに主要な関心があるのだろうという見当はついてきた気がする。
読む前の漠然たる思い込みとして、厚生省に勤務してから大学に転じたという経歴やわりと福祉関係の発言が多いことから、福祉専門の実務家タイプの人なのかと思っていたのだが、実際には全く違っていたようだ。大学院では科学史・科学哲学を専攻したとのことだし、二冊の書物の内容からは、実務家タイプというよりもむしろ各種の理論や多岐にわたる学問諸分野に広い関心をもって気宇壮大な議論を繰り広げるタイプの人のようだというイメージが浮かび上がる。科学史・科学哲学という背景のせいか、自然科学にも深い関心をもち、いわゆる文理融合型の学問を志しているようだし、その主題も、人類史全般にわたる広大さを持ち、そうした壮大な展望の中に現代社会を位置づけようとしているように見える。実践的関心が強いのも一つの特徴で、アカデミックな議論にとどまらず、福祉政策・都市計画・医療政策等々の諸領域に関する積極的な提言を――但し、目前の現実にすぐ対応するというよりは、人類史の転換点という認識に立ったグランド・デザインとして――打ち出そうとしているように見える。
こういう仕事の仕方は、私自身の研究スタイルとはおよそ異質である。私も自分の専門を離れた諸分野の理論に関心が全くないというわけではないが、それらについてなにがしかをかじったとき、それを自分の研究に直接生かそうとするのではなく、せいぜい「隠し味」効果を期待するにとどめてきた。これに対して、著者は文理双方にわたる諸学問の最近の知見を次々と紹介し、それらを貪欲に自己の体系の中にとりこもうとしている。また、政策提言的発想は私には無縁だが、著者は積極的である。

私のスタイルと異質だからといって、毛嫌いするとか、まるで駄目だと言おうとするのではない。むしろ、異質だからこそ面白いと感じる面がある。両著の内容は多岐にわたり、簡潔に要約するのは不可能だが、大まかな印象としては結構当たっているのではないかと感じさせるところがある。新書本の枠内でたくさんのことを述べているので、一つ一つの事項に関する著者の論述がどの程度堅実なのかを判定することはできない。ひょっとしたら単なる大風呂敷や博識の顕示になっているかもしれないが、わりと的を射ているのかもしれず、どちらとも言えない。この辺の検討は、取り上げられている諸分野の専門家に任せるしかない。

全般にわたる要約は不可能だが、ともかくもこの辺が主要な内容だろうと思われる論点を私なりの観点からまとめると、人間の歴史は「拡大・成長」と「定常化」の交代というサイクルをたどってきたという大づかみな把握が議論全体の前提をなす。そして、現代は「成長期から定常期への移行に当たる」という時代認識が中心テーマのようだ。現代がそうした時期に当たる以上、「限りない拡大・成長を前提としないような福祉国家」への模索、言い換えれば「脱成長の福祉国家」が目指されるというのが実践的主張である。それは「資本主義・社会主義・エコロジーのクロスオーバー」とも言い表わされている。関連するもう一つの議論として、定常化の時代には「精神革命」が伴うという主張があり、これは独自の宗教社会学的・文明論的考察を伴っている。

こういう風にだけまとめてしまうと、そんなのはわりとありふれた議論で、大した新味はないとか、壮大な大風呂敷に過ぎないではないかとの批評にさらされるかもしれない。私自身、そういった懸念を覚えないではない。だが、そういった批判で片付けてしまうのはあまり生産的でないという気もする。個々の論点の堅実さはともかく、多数の論点をこのようにまとめ上げる才能は一種独自のものだし、結論的な展望は、細部をさておいてごく大まかに言えば、一応うなずけるように思える。個々の事実の指摘の中にも面白いと感じられるものがいくつかあった。

全体としてバランスをとった評価をすることはできないし、私自身の研究テーマとの直接的な接点は極小だから、これを読んだから私の研究に直ちに役に立つというわけではない。ただ、ともかく視野を広げ、脳をリフレッシュさせる効用はあったと感じる。